

熊本高専
熊本キャンパス
図書館だより
第32号
2021年2月発行

〈目 次〉

- ランキングTOP5 p.2
- 今年度の図書館の様子(コロナ感染症対策について) p.3
- 図書委員長一押しの一冊 p.4
- 図書館長エッセイ:「橋」をめぐる読書から p.5~7
- 校内読書感想文コンクール結果発表 p.8
- 最優秀賞・優秀賞感想文 p.9~10
- 入賞作品の対象本紹介 p.11
- 編集後記 p.11
- 図書館統計データ p.12

く
ぬ
ぎ
の
森



キャンパス内のカワヅザクラとメジロ 撮影者:HI科 合志和洋先生

ランキング

熊本高専内で借りられた本のランキングTOP5をご紹介します！

実はTOP50のほとんどが英語学習本で占められています。例年は小説系のランキングですが、一風変わって今回は勉強特集としたいと思います！

ランキングを見る限り、英検やTOEICの学習書が多く借りられています。高専4、5年生になると、英語の資格によって英語の授業が免除になります。また大学受験でも英語科目が免除になる可能性があります。1～3年生の皆さんにはぜひ取得を目指してみてください！

TOP1

『英検2級でる順合格問題集』

[9冊]



TOP2

『合格できる単熟語』：英検2級

例文でまるごと覚える：28日完成

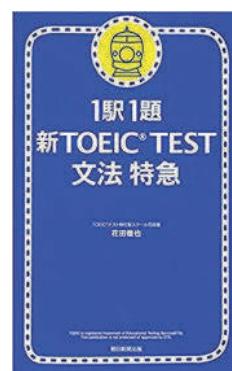
[8冊]



TOP3

『1駅1題新TOEIC TEST文法特急』

[6冊]



TOP4

『公式TOEIC listening & reading

問題集5』

[6冊]



TOP5

『英検2級頻出度別問題集』

[6冊]



今年度の図書館の様子

(コロナ感染症対策について)

今年度は図書室も例外なくコロナウイルスの影響を受けました。来年度も収まらなければ同じ様な利用法になるかもしれません。何より皆さんに安心して利用してもらいたいので、今年の図書室の様子と感染対策を紹介したいと思います！

対策その1 開館時間

平日のみ開館に変更しています。
(土曜日は閉館中です。)
開館時間は8:30～18:00 です。



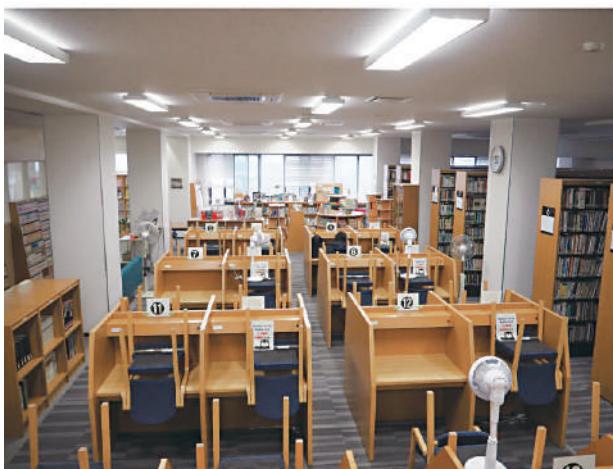
対策その2 空気の入れ替え

窓は基本開放しています。また天候や室温等に応じて空調を行っています。



対策その3 自習室の利用

自習室は毎朝除菌しています。
利用時間は1回につき30分以内厳守でお願いしています。席は離れて座ります。



対策その4 本の貸し借り

返却された本の表面は除菌シートで除菌しています。
受付カウンターは毎朝除菌しています。



図書委員長一押しの一冊

『僕は僕の書いた小説を知らない』

今年度図書委員長を務めさせていただいた向井と申します。読書感想文で入選したわけでもないですが、編集の都合上1ページ追加しなければならなくなつたので1冊だけ紹介させてください(笑)

軽く自己紹介をしますと、昨年読書に関してはビジネス本・自己啓発本ばかりを読んでいました。ただこの手のジャンルってある程度読むと「どこかで見たことあるなあ～」という感じで飽きが来ます。実際来てしましました(笑)。なので今年は小説を読むぞ！と意気込んで一番初めに手に取った本が『僕は僕の書いた小説を知らない』でした。表紙の絵柄も素敵ですよね！表紙で手に取る方も少なくはないのではないか？(kindleでおすすめランキング一位だったから手に取っただなんて言えない)

前置きが長くなってしまいました。決してふざけているつもりはありません。では早速(やっと)内容に入ります！ネタバレしそうない程度にお話しさせていただきます。

この物語は主人公が目を覚ましたシーンから始まります。起きて彼は気づきます。違和感のある自室、そして昨日の記憶がないことに。勘の良い方はお気づきでしょう。主人公は記憶喪失に、しかも一日事にリセットされる難病を患っています。実は「2017年 4月17日 月曜日 AM06:30」のようにシーンによって日時が書かれています。シーンごとに日常・仕事・恋愛・友人等の様々な展開がある中で、記憶がリセットされる主人公の複雑な心情・葛藤を味わいながら読めるというのは中々に新鮮でした。私は毎日お風呂につかりながらワンシーンごとに読んでいました。そういう楽しみ方もできる一冊です。

終盤まではこの調子で物語が進みます。一気に読み進めると退屈かもしれません。しかしこれはわざとだったのです。終盤で1度だけでなく、2度3度衝撃の真実を知ることになります。退屈さは演出だったのです。その事実にも驚かされます。

記憶を失う主人公の物語をシーンごとに毎日読んで、日々の大切さに気づかされました。今読んでくださっている皆様も考えてみてください。突然ですが、Apple創設者のジョブズは毎朝鏡を見て「今日人生が終わるとして、今日することには悔いはないか」と自分に問いかける習慣があったそうです。高校と違って高専は自由な時間が多く存在します。学生の皆さん、悔いのない日々を送っていますか？答えがNOの方はぜひ手に取ってみてください。以上本の紹介でした。主人公の職業はお楽しみで！

向井 直希



「橋」をめぐる読書から

図書館長 村上 純

小学生の頃、『肥後の石工』という本を読んだことがある。内容はすっかり忘れている。改めてウィキペディアで調べてみた。この本は今西祐之著の児童文学で、江戸後期の肥後の名石工・岩永三五郎について書かれたものだとある。『トピックで読む 熊本の歴史』(岩本税、水野公寿編、葦書房)によれば、九州の長崎、鹿児島、熊本には眼鏡橋が多く、中でも熊本は最も多いそうで、靈台橋や通潤橋は有名である。これらの多くは幕末に架けられて、その時代に活躍したのが先の三五郎の一族(種山石工と呼ばれた)だったとのことである。三五郎の父の林七は長崎から種山村(旧東陽町、現八代市)に移住し、「石切りをしながら長崎で習った石橋を研究し、熊本における石橋づくりの元祖となった」という。三五郎の甥の橋本勘五郎は明治政府に招かれ、東京の万世橋や浅草橋などの建設に参加したともある。

なぜ『肥後の石工』のことを書いたかというと、昨年末から新年にかけて何冊か読んだ本の中で、『風景の中の橋—フランス石橋紀行』(小林一郎著、とねりこ舎)という本の印象がしばらく残っていて、ふと昔、石工の話を読んだことがあるのを思い出したからである。著者の小林氏は熊本大学工学部の元教授で、内容は調査研究のために実際に訪れた「フランスの石橋の美しさと橋のある風景の優しさ」を語ったもの。豊富な写真でもその「美しさと優しさ」を味わわせてくれる。

この本によると、ヨーロッパの人々は石橋に「壊れないもの」のイメージを持ち、それは「変わらずにあるものの象徴」であるという。ヨーロッパの石造文化に触れるときに著者は、「いつも『時代を超えた価値』は存在するということを思い知らされる」とある。「彼らは時間も空間も越えた絶対者の存在を感じている」のだと。そして次のようにも。「石の文化が絶対者の存在を感じさせるのではなく、まず絶対者の存在を信じる人たちがいて、そのような考え方、あるいは生き方の表現方法として石が用いられたのではないかと思えてなりません。」

それとは対照的に、洪水の多い風土のわが国の橋梁は「消費財的な渡るための道具と考えられ

て来」たという。それが今まで続いてきた。「私たちはあまりに即物的で『今』しか信じられないようです」と著者は言う。「しかし、それでは九州の石橋文化を担った人々はどう考えていたのでしょうか」と尋ねかけ、その答えとして「九州の石橋は永久構造物として造られました」と書いている。それらの人々は「時のまなざしを十分に感じ、喜びを持って仕事をしたのです」と。

本来、橋を造る者は「自然の偉大さを畏怖し、(中略)これから造り出す物が神の怒りに触れることのないように祈った」もので、「人はかくも慎ましやかに、ひっそりと風景の片隅に橋を置いた」のだとある。住民は感謝の念で橋を渡り、驚嘆の眼差しで橋を見上げた。その風景はどんなに美しかったことだろうと。

フランスには「悪魔の橋」と呼ばれる橋が百近くあるそうだ。激流や深い谷の橋に、人は「神だけではなく悪魔の業を見る」。彼らは小さな悪魔が造ったことにすると大きな悪魔(災害等)は取りつかないと信じた(ギリシア建築の柱や軒先の植物模様も、自然の一部に見せて神の怒りに触れないようにするためだという)。「自然への畏怖なしに永久構造物を造り、それを守っていくことは出来ない」と著者は書いている。

橋は「いくつもの出会いや別れが繰り返された『生活の場』でもあるのです。そこに、変わらずにあるからこそ『橋』と呼ばれるのです」ともある。「中世の石橋がそうであったように」…

大学図書館の除籍本譲渡会で一昨年いただってきた本たち(「たち」とは人に付く接尾辞であるが、須賀敦子氏の筑摩書房刊『遠い朝の本たち』の使い方を思い出して真似てみた。私も本は大切に扱い、愛蔵しているので)の中から去年読んだ一冊、『中世を旅する人びと—ヨーロッパ庶民生活点描』(阿部謹也著、平凡社)の I 章「道・川・橋」に取り上げられた「橋」の話も興味深いものだった。橋の建設の目的は何より経済上のものであったが、「すべての事柄を靈的な目的に結びつけて正当化していた中世世界では、宗教的な目的が掲げられていたそうだ。また、「都市や領域君主の領域支配圏形成のための重要な政策の一環」という隠された目的もあった。

橋の建設や維持には莫大な費用がかかり、その

資金調達法として贖宥符(教会の権威により、祈りや喜捨、教会詣でで軽い罪の赦しを与えるもの)を出したり、通行料を徴収したり、「ときには橋に耕地や家、森、水車、浴場などが寄進されることもあつたそうである。その場合、橋は法人格を持ち、「橋を『領主』とする農民が橋に賃租を納め、これが橋管理官の手で管理されて橋の修理にあてられることもあつた」という。「橋は来世を想う人びとのこの世における善行のシンボルとして多くの寄進の対象になった。」

先の小林氏の著書の引用とは少し異なるようだが、「橋梁建設技術が未熟で財政も不十分であつたために、中世の橋は今日のわれわれが現代の橋について感じているように堅固で恒久的なものではなく、一人一人が支えなければ維持しえないものと考えられていた」と阿部氏は書いている。費用面からだけでなく、「河の靈や水の精をなだめたり、橋のたもとに小聖堂を建てて神に祈ることによって、辛うじて橋を維持しうると考えられていた」ともあるから、やはり小林氏の言う「自然への畏怖」があったのであろう。

「橋は他の土地とは異質な空間をなしていた」ので、裁判集会の場や刑場になつたりもしたという。また、「河川は冥府への入口であり、橋を通って死者が冥府に入ると考えられていた」そうで、だから橋は「現世における人と人の絆」であるだけではなく、「人と彼岸を結ぶ絆」でもあつた…

先日読んだ(前から持っていたが)『遅れてきた肥後の維新』(高濱幸敏著、葦書房)は、「明治維新前後の肥後の歴史」に「(保守的な)精神風土の凝結」を見ようとするもので、宮崎滔天や横井小楠、佐々友房などに関する六篇を収めているが、その後に布田保之助が取り上げてあつた。矢部の総庄屋兼代官を務めた保之助は道路や農業土木等に著しい業績を残し、中でも「通潤橋の架橋は、保之助の名を不朽のものとし」とある。この橋は水がなくて収益の乏しい村を建て直すために、通水目的で緑川の支流の轟川(五老ヶ滝川)に架けられた。「橋よりも五・七メートルも高い用水路への送水」は当時の技術では困難を極めた。石積みや水管接着のための漆喰の研究が重ねられ、「『覧水吹上』の法則を模し」た「U字管の原理」の採用によりその送水が可能になつ

たといふ。

「石造目がね橋」の架橋では、保之助は「岩永三五郎や小野尻(村の)卯一(卯市、宇一、宇市とも書かれる)等の名石工を棟梁として十余を完成しているそうだ。通潤橋でも「棟梁は石工卯一、副棟梁は弟の丈八がつとめた。丈八は御一新のち橋本勘五郎と改め、保之助の子弥門とともに明治政府の土木寮出仕となつた(前述。八代市東陽町の勘五郎の生家前には彼らの功績を記念した石匠館がある)。保之助は明治六年に七十四歳で亡くなる前年、天杯を下賜され、東京日日新聞にその記事が載つたといふ。その記事には、「(前略)爾後水利疎通し墾田大に開け四拾余町の膏田を得たり二百余戸の産貢米殆ど百弐拾余石僅かに一人の意匠にして巨万の利を越す(後略)」とある。著者は、「彼の功績の底流には、その遺業についての顯彰の華々しさに拘らず、(中略)政治疎外の深さが秘められていたように思われてならない」と書いている…

「橋」について書こうと思ったのは、昨年七月に本県の県南地域を襲つた豪雨で甚大な災害が出て、多くの橋が流されたことを知つたからである。五年前の熊本地震では阿蘇大橋が崩落(今年三月に新阿蘇大橋として開通予定)し、テレビで見たその後の映像は衝撃的だったが、今回の球磨川第一橋梁の流出の映像も同じくであった。

くまもと技術革新・融合研究会(RIST)は、昨年十一月に八代・人吉・球磨地域の被災と復興をテーマとしたオンラインフォーラムを開催した。復興関係は本校八代キャンパスの建築社会デザイン工学科の先生方による、国登録有形文化財他の歴史的建造物を取り上げた二件、球磨川の防災に関して橋梁を扱つた一件の講演であった。前者では歴史的価値の高い意匠などが興味深く、後者では被災した数々の橋梁の写真が特に印象的だった。

建築と意匠については、近年『建築探偵の冒険〈東京篇〉』(藤森照信著、筑摩書房)や『光の教会—安藤忠雄の現場』(平松剛著、建築資料研究社)などを読んで以来関心を持っており、またいつか機会があれば何か書いてみたいと思っているが、ここでは直近に読んだ本から、橋について思

い巡らせたことを書かせていただいた。今回の豪雨で被災した建造物(橋を含め)の早期の復旧を願っている。掲載した写真は、小林氏の本を読んで石橋を見たくなって出かけてきた、小野小町ゆかりの小野泉水公園内(熊本市北区)に移設されている安政期の「正院めがね橋」である。

付け足しになるが、愛読している須賀敦子氏の本にも橋が登場していたなと思って(同氏はイタリアに長く暮らし、イタリアといえば古代ローマの石橋が思い浮かぶから。石橋技術は古代ローマからフランスもそうであるが、日本にも長崎に伝わり、それが「肥後の石工」に伝わった。)、本棚から何冊か取り出してめくってみたら、「橋」が題名になっている文章があった。『地図のない道』(新潮社)所収の表題作の中の「その二」が「橋」である。この作品を紹介しようと思いパラパラと読み返してみたものの、簡潔に述べるのが難しい。著者に『ミラノ 霧の風景』(白水社)という本があるが、その「霧」のような感じで捕まえたと思ってもすぐに消え去ってしまうはかなさの漂う文章なのである。なので、橋に関わるところを挙げるだけにしたい。

ヴェネツィアの大運河(カナル・グランデ)の両岸を繋ぐ橋は三本しかないそうで、著者が初めてこの島を訪ねたとき、有名なリアルトやアカデミアなどの大きな橋よりも、「小型のオベリスクのような角柱が欄干の両端についた、大きくはないけれど、どっしりした大理石の橋」が記憶に残ったという。「どちらかというと地味なその橋が」。夫を亡くし、日本に引き揚げた著者は、二十年ほどたってからまたその橋のたもとに行ってみた。「グリエの橋」というのがこの橋の名。グリエとは、オベリスクのように先端が尖った細長い角柱のことである。十六世紀に造られたものだそうだ。「橋のそばに立って、ここを越えて街へ行く旅行者たち、あるいは滞在を終えて駅に向う人々の波を、流れ去った二十五年という歳月をそのなかに数えるように、私はぼんやりと眺めていた。」

「大運河の橋のなかで私にとっていちばん親しみがもてる」というアカデミアや、「細い水路にかかる無数の小さな橋」の話もあるが、「上がったり、下りたり。ヴェネツィアの道のリズムが私を遠い大阪に連れて行く」とあって、「高麗橋、今橋、淀

屋橋、土佐堀、横堀、道頓堀、堂島川」など、「堀や川、それにかかる橋は、大阪の町人にとって日常と非日常すべての基点となる大切な指標だった」と、祖母や叔母たちなど商家の家系のことを追想している…。

ついでに、愛読している作家をもう一人。稻葉真弓氏のエッセイ集『少し湿った場所』(幻戯書房)にも「橋」が付くものがあつて、「橋のある街」と「石橋の下」。前者は次のように始まる。「橋の向こうに橋があり、さらにその向こうに橋がある。それら無数の橋は、河口に向かって小さくぼやけ、その下をよどんだ一本の川が、黒く粘りながら続いている。」その運河の街に十年近く住んだという。「ただ橋の向こうに橋があり、そのたくさんの中を行き来しているうちに時間は流れ、いつしか作品が生まれていった。」後者は子供の頃の思い出か。

『月兎耳(つきとじ)の家』(河出書房新社)は同氏の遺作となった小説三篇を収めている。その二篇目の「風切橋奇譚」がいい。主人公の美弥は母方の叔父から頼まれてその橋のほとりにある彼の別荘の守り人となった。「風切橋は美弥が暮らす家と森とを結ぶ小道の間、沼の端にかけられている。」そこは、「あちらの世界とこちらの世界との境目」になっている。(阿部氏の本にあった中世の人々の考え方と同じ、「人と彼岸を結ぶ絆」。)「沼のほとりと森に差し渡した木の板だけが、ふたつの時間を隔てる魔法の場所。といつても、現世に生きる美弥がそこに立っても、どうということはない。ただ、森の方角から涼しい風が吹くだけである。「橋を渡るひとのかすかな気配は、この家を守るものにしか聞き取れない」…





令和2年度校内読書感想文コンクール表彰式にて (2020年10月22日)

令和2年度校内読書感想文コンクール結果発表

【最優秀賞】『人間失格』を読んで
2年2組 片嶺 愛華

【優秀賞】『自殺の9割は他殺である』を読んで
2年1組 生田 愛

【優秀賞】『線は、僕を描く』を読んで
2年3組 中久保 慶一

【優秀賞】『二十四の瞳』
1年1組 佐々川 享

【優秀賞】『イレギュラー』を読んで
1年1組 水野 李咲

【佳作】『十二番目の天使』を読んで
2年1組 増山菜々

【佳作】『生きてゆくうえで大切なこと』
2年1組 光本 進之佑

【佳作】『科学者と芸術家』を読んで
2年1組 小田原 悠太

【佳作】『私がバカすぎて』
2年1組 富田 瑞葵

【佳作】『アルジャーノンに花束を』を読んで
2年3組 崎口 一

★最優秀賞(1編)には賞状および副賞として図書カード(10,000円分)、優秀賞(4編)には賞状および副賞として図書カード(6,000円分)、佳作(5編)には賞状および副賞として図書カード(3,000円分)が贈られました。



第66回青少年読書感想文全国コンクール
熊本県審査において片嶺愛華さんが「優秀賞」、佐々川享さんが「入選」となりました
ので、2021年1月14日に校長室にて表彰式を執り行いました。

校内読書感想文コンクール【最優秀賞】
第66回青少年読書感想文コンクール
熊本県審査「優秀賞」
『人間失格』を読んで
2年2組 片嶺 愛華

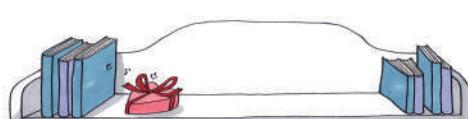
『人間失格』、それは、読む度に自身の心情的な変化を感じ取らせてくる作品だ。というのも、数年前に読んだ時、その時も感想文を書いたのだが、今改めて当時の感想を見てみると、全く共感できない箇所が、いくつも存在する。当時の自分を思い返してみると、その時の心は間違いなくそう感じていて、自慢げに原稿用紙を見せびらかしていた程だった。そんな奥深く、人の心を揺さぶる作品をもう一度読み、見つめ直したいと思った。

この物語は、二人の視点によって綴られている。一人は、主人公と言うべき大庭葉蔵という男性、もう一人は、葉蔵の手記を読み、人伝に彼のことを聞いただけの「私」。この「私」は太宰治自身を指しているのであろうが、「私」視点のはしがきとあとがきが、この物語の質をぐっと上げているように思う。まずは冒頭のはしがき。これは、この作品中で私が一番好きな箇所である。葉蔵が写った、三葉の写真についての説明や感想が書かれている、それは、これから読み進める本文の内容をぼんやり示唆している。幼年期、青年期、そして老人のようになっている姿それぞれを捉えた写真。ここだけを読んだとき、その人物が誰なのかさえ分からなかつた。しかし、本文を読み終えた後、無性にはしがきが気になって、戻ってきてしまつたのだ。それは、主人公が変容していく過程と変化の乏しい希薄な生の香りをありありと表現したもので、本文とリンクしたものだからだ。しかも、本文では分かりづらい表情や容姿の印象等も描写しており、より色鮮やかに想像することができた。そしてさらにおもしろいのが、三枚目の老人のような写真である。この部分では男が白髪であること、家が古く、ヒビが入っていること、「死相」という言葉が使われていることなど、年老いた男性をイメージさせる表現が多い上、年齢については全く情報がない。つまり、この男性を六十歳以上の老人だと思う人が、大勢いるであろうということだ。この伏線が本文の最後に回収されていた。そこには、葉蔵が当時二十七であることと、白髪のせいで大抵の人から年老いて見られる、ということが書いてある。これらを踏まえると、私達読み手もその「大抵の人」に含まれていた、と感じることができる。挿絵や、豊かな言語表現によるものとは一味違った没入感。たった三、四ページのはしがきだけで、こんなにも楽しむこと

ができた。

次は、あとがきについて。ここでは、冒頭のはしがきに登場する「私」が、大庭葉蔵の生涯を知る経緯が語られている。こちらも、たった四ページ程なのだが、ここに、物語の核心が詰まっているように感じた。まず、スタンダード・バアのマダムが、自己を「人間失格」と評した葉蔵を、「神様みたいな子」と話す場面である。私はこのワードに強い衝撃を受けた。なぜなら、私が葉蔵の手記を読んで感じた彼の印象と、マダムが知る彼の人柄が、全く異なっていたからである。私は日頃から、人によって価値観や考え方方が違って、個々人が別々にものの見方を持っていると意識して過ごしているし、自ら見聞したこと以外は参考程度にしか信用しないようにもしている。しかし、そんな私でも、葉蔵が自己を卑下し、嫌悪し、罵り続ける手記を三つ、およそ一四〇ページを読み終えたとき、無意識下で、葉蔵はどうしようもない駄目人間だ、と思い込んでしまつた。気を付けているつもりで、実はまだまだ意識が低かったことを思い知り、改めて認識の差異について考えることができた。また、この手記を読んで尚、葉蔵をいい子と形容するマダムの姿は、まさに「百聞は一見に如かず」の様相を呈していて、その気高さに、少しの憧憬と敗北感を抱いた。

そこで、改めて冷静な視点を持って、葉蔵を見つめてみた。すると、以前のような低い評価よりも、臆病でピュアな人、というイメージの方を強く感じた。人の機嫌の良し悪しや、人から嫌われること、嘘を見抜かれること、そして人の幸せを奪うこと。様々なことで怯え続ける葉蔵であったが、その理由の多くは、人間に嫌われたくない、という無垢で純粋な願いのように思つた。自分を偽つて、お道化までした若い頃の葉蔵は、純粋で賢いがゆえに、負の感情に感染されやすかつたのかもしれない。しかし、成長していく中でも、常に人を想う心を失わなかつたからこそ、周囲は彼をいい子と語る。それこそが、葉蔵の最大の美点であると、私は思つている。この作品を読んだ後、私はいつも励まされるような気持ちがしてくる。人が完璧たり得ないということを教えてくれる上、他人から見た自分は、意外と好印象かもしれない前向きに考える勇気をくれる。詩的な表現の裏に隠された真意を考察していけば、雑念を排して心地よい思考の海に沈むこともできる。こんなにも優しく、人の心に寄り添う『人間失格』を、今後も読み返し、その度に噛み砕きながら、大切にしていきたいと思った。



校内読書感想文コンクール【優秀賞】 第66回青少年読書感想文コンクール 熊本県審査「入選」

『二十四の瞳』を読んで

1年1組 佐々川 享

『二十四の瞳』というタイトルから内容が想像できなかつたため、この本を読んでみようと思った。

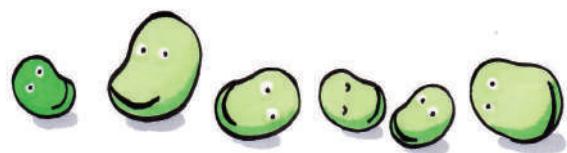
小豆島の小さな寒村に師範学校を卒業したばかりの「おなご先生」が赴任してくる。閉鎖的な村人や子どもたちと、大石先生の村人には眩しそうな新しい感覚を持ちながら真っ直ぐな心のふれあいと、貧困や戦争等時代の波に翻弄されながらも強く生きる先生と子どもたちの生きざまを描いた小説である。

私がこの本を読んで最も感じたことは、大石先生の人間としての芯の強さである。大石先生が小豆島に赴任してきたとき、村の風習にとらわれない活発な先生に、当時の閉鎖的な考えの寒村の人々は、自転車と洋服といういで立ちで現れたハイカラな先生を容易に受け入れる事ができず、理解に苦しんだ。親がそうであるから当然大石先生は子どもたちから、からかわれ笑われてしまっていた。しかし、彼女は何を言われても思われても常に生徒の事を考え、行動し続けていたのである。失敗した時でも何が一番良いのか、ということを前向きに考えられる人だった。大石先生自身に辛いことがあっても、教え子に様々な運命が訪れても決してぶれない芯の強さと、理解されずとも諦ずに村人と関わりを持ち続けた心の広さに感銘を受けた。私にも、思い当たる先生が一人いる。とても最近の出来事だ。中学校生活の中で、その先生とは意見が合わない事もあり、コミュニケーション不足も手伝ってお互に誤解してしまうこともあった。私の中では得意ではない先生だと思っていた。しかし、それは私自身で勝手に決めつけていただけであって、ほかの生徒はそうは思っておらず、とてもその先生を慕っていた。私のその先生に対しての印象は変わることなく卒業するのだろうと思っていたある日突然、新型コロナウイルス感染拡大防止策として、首相の緊急会見で、全国の小・中・高校の休校を要請したため、突然の休校となってしまった。休校前の最後の登校日の帰りの学活で配布された学年通信には先生の想いが読み取れる一文があった。途中で生徒と過ごす日々を追われる先生の無念さ、皆で学んだ差別学習などの大切さなど、まるで祈るような気持ちが込められた学年だよりだった。先生の気持ちが伝わってきて熱い思いが込み上げてきた。急な対応を迫

られる中で、先生は、思いを込めてプリントを作ったのだろう。そういうことを考えると、大石先生が急に学校に来られなくなったときと同じように、なんだか急に学校生活を休止しなければならないという事に、また、先生ともう意見しあう日が突然終わるのかと思うと、急に物足りないような淋しい気持ちになった。三学期のはじめには卒業まであと〇日！と、言っていたのに、このような状況になるとは、だれも予想しない事が起こった。

時代背景や理由は異なるが、戦時中や、今回の休校措置の様に、どうにもできないことに翻弄される時こそ大石先生の様に芯を強くし、ぶれない心で居なければならぬと思った。こんな不安や恐怖が渦巻く今の世の中では人の心の弱みにつけこんだ詐欺やデマに惑わされたりしない様に自分自身で物事を冷静に見極めなければならないと、ニュース等を見ても思う。大石先生の時と、時代や環境が違っても、根は同じであると感じた。

私の、これまでを振り返ってみても、自分には合わない、この人とはやっていけない、と決めつけていた同級生や先生が沢山いたが、それは自分が未熟だったからだ。それは、相手の事を理解する前に、先入観や思い込みで決めつけてしまい、その人の事を理解しようとせず、思い込みで知った気になってしまっていた。今、冷静に考えてみると、人を嫌いになったり、信用できなかつたりする理由は、その人の事を理解できていないことだと思った。このことは、作中に登場する寒村の村人と自分が同じではないかと気が付いた。自分は正しく、相手がおかしい、間違っていると思いがちだ。そこで、先入観を捨て、積極的にコミュニケーションをとることで相手の事を知ろうとする努力が必要であると思った。大石先生にならい、自分もこれから新しい学生生活では沢山の人の事を知って関わっていきたいと思う。時には失敗するかもしれないけれど、失敗がなければ成功を感じる事もできないだろうと思う。大石先生が赴任する前の様に自分も実は不安な気持ちが大きいが、想像もつかない学生生活の中で、学業に人間関係にと困難さを感じるかも知れないし、苦難もあるかも知れないが、『二十四の瞳』で読み取ることが出来た事を生かして自分も瞳の輝きを持って新しい生活に向かっていきたい。そして四月からの新しい学校生活の中で、新しい大石先生に出会えることを楽しみにしている。



校内読書感想文コンクール入賞作品の対象本紹介

【最優秀賞】

『人間失格』を読んで

2年2組 片嶺 愛華



【優秀賞】

『自殺の9割は他殺である』
を読んで

2年1組 生田 愛



【優秀賞】

『線は、僕を描く』を読んで

2年3組 中久保 慶一



【優秀賞】

『二十四の瞳』

1年1組 佐々川 享



【優秀賞】

『イレギュラー』を読んで

1年1組 水野 李咲



【佳作】

『十二番目の天使』を読んで

2年1組 増山 菜々



【佳作】

生きていくうえで大切なこと

『生き方』

2年1組 光本 進之佑



【佳作】

『科学者と芸術家』を読んで

2年1組 小田原 悠太



【佳作】

私がバカすぎて

『店長がバカすぎて』

2年1組 富田 瑞葵



【佳作】

『アルジャーノンに花束を』を
読んで

2年3組 崎口 一



編集後記

図書館だより『くぬぎの森』第32号をお届けします。今年度はコロナ禍の影響により今までと違った体制で活動してきたため不慣れなことばかりでした。またまともな活動ができなかつたため、私の最後の仕事である『くぬぎの森』に少し力をいれてみました。いかがだったでしょうか。少しでも楽しく読んでいただけたなら幸いです。

最後に、1年間学生図書委員会のサポートをいたいたいた学生課図書係長小崎さん、『くぬぎの森』作成に協力していただいた村上先生、合志先生、そして学生図書委員の皆さんに感謝申し上げます。

CI4 学生図書委員長 向井 直希

図書館統計（令和2年 1月～令和2年12月）(令和3年1月7日現在)

入館者数	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
	3,464	2,014	465	532	298	712	662	245	694	1,090	783	593	11,552

蔵書数	和書	洋書	合計
	70,503	4,927	75,430

日本十進分類法(NDC)	0総記	1哲学	2歴史	3社会科学	4自然科学	5技術、工学	6産業	7芸術、美術	8言語	9文学	その他	合計
分野別貸出冊数	313	136	15	135	270	417	47	213	1,206	584	0	3,336

月別貸出冊数	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
1年生	21	34	0	0	0	14	3	0	5	7	1	5	90
2年生	28	66	5	0	0	5	11	13	10	31	22	31	222
3年生	177	35	0	3	0	71	112	9	97	124	136	139	903
4年生	74	89	4	1	0	20	23	0	42	85	55	138	531
5年生	46	23	1	26	5	23	71	5	39	70	65	82	456
専攻科1年生	50	28	0	7	0	3	7	0	2	15	14	14	140
専攻科2年生	13	6	0	10	24	25	33	8	23	16	11	12	181
教職員	39	120	122	38	30	26	66	33	62	42	35	75	688
一般利用者	3	12	9	10	11	9	9	12	13	8	15	14	125
合計	451	413	141	95	70	196	335	80	293	398	354	510	3,336

開館時間

前期(4月～9月)の月曜日～金曜日	8：30～20：00（退館時間19：50） 【ただし、長期休業中は17：00（退館時間16：50）】
後期(10月～3月)の月曜日～金曜日	8：30～19：00（退館時間18：50） 【ただし、長期休業中は17：00（退館時間16：50）】
土曜日	12：00～17：00（退館時間16：50） 【ただし、長期休業中は休館】

休館日

- ・日曜日
- ・長期休業中の土曜日
- ・国民の祝日
- ・年末年始の休業日
- ・一斉休業日
- ・その他の臨時休館日

*開館時間および休館日についてはMyOPAC（利用者の個人ページ）で確認の上、ご来館ください。

貸出期間と貸出冊数

貸出の種類	借受者	貸出期間	貸出冊数	備考
一般貸出	教職員	2週間	5冊以内	
	学生			
	一般			
長期貸出	教職員	2ヶ月	10冊以内	教育および研究に必要な図書館資料に限る
	学生	春季・夏季・冬季休業期間とその前後1週間	10冊以内	一般貸出の冊数を含む
	卒業研究用 特別研究用	2ヶ月	10冊以内	卒業研究および特別研究に必要な図書館資料に限る